



2012年3月14日放送

漢方頻用処方解説 猪苓湯②

日本大学 統合和漢医薬学分野 上田 ゆき子

今回は猪苓湯の臨床応用や鑑別処方についてです。猪苓湯の古典での使用目標は、小便不利、口渇、排尿痛、残尿感などの尿路感染症症状などですが、現代でも当時の使用目標からあまり広がりを見せず、泌尿器科疾患の薬として広く使用されています。

ここでは特に、猪苓湯の特徴である止血作用に着目して、血尿をきたす疾患における猪苓湯の使い方について述べていきたいと思えます。まず尿路結石への応用です。現代医学的治療では、大きい結石には積極的治療として超音波破碎術を行い、小さい結石には保存的治療として鎮痛剤投与と補液を行うのがスタンダードです。漢方も保存的治療のひとつです。猪苓湯は尿量を増加させ、結石の早期排出を促します。これに尿管攣縮による痛みを緩和する目的で芍薬甘草湯を併用すると、より排石がスムーズになります。

次に前立腺炎への応用です。尿路から逆行的に細菌感染して炎症を起こし、血尿を起します。前立腺肥大に代表される前立腺の疾患は、一般的に加齢現象、つまり腎虚によって起こるとされ、八味地黄丸が適応になります。しかし、前立腺炎のように、炎症症状が強い場合は八味地黄丸単独では効果が弱く、猪苓湯を併用して抗炎症効果を強める使い方があります。

次に膀胱炎、尿道炎への応用です。これらは猪苓湯を用いる代表的疾患といえます。抗生物質がない時代は、漢方薬の効果に大いに期待して使用されていたろうと推測されますが、現代では明らかな細菌性、急性期の場合は抗生物質が第一選択で、そのうえで猪苓湯を併用していきます。

慢性再発例、炎症所見が激しくないが訴えが強いものなどは、猪苓湯合四物湯を用いま

す。ここで猪苓湯合四物湯について説明しましょう。これは本朝経験方の薬です。本朝とは日本です。経験方とは誰が最初に使ったかははっきりしないが、古医書に記載がある処方という意味です。

中国では使用されず、日本で経験的に使用されてきました。およそ江戸～明治の書物に記載があります。本間棗軒の『内科秘録』には、「3年の間、尿血が治ったり、再発したり慢性化した例に猪苓湯を四物湯と合する。」とあり、浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』には、「猪苓湯合四物湯 血淋を治す。」と記載があります。

尿血と血淋という言葉が出てきましたが、「尿血と血淋は異なる」と本間棗軒は述べています。「血淋とは尿道病で渋り痛みが甚だしく出血は少ない」ということですが、いずれの場合も猪苓湯合四物湯を用います。

猪苓湯合四物湯に配合されている四物湯は『和剂局方』が出典で、地黄、当帰、川芎、芍薬の4薬からなる婦人病の薬です。浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』には、「血道を滑らかにする働きがあり一概に血虚を補うものとするは非なり。」とあり、四物湯は血虚を補う薬ばかりではない。瘀血にも用いる。例えば障子がきしんで開かないときに、溝に油を塗って滑らかにする働きがあると述べています。つまり、物事が上手く運ばないときに運ばせる働きがあります。慢性再発例などで、治癒に向かわせられないときに、四物湯を合方することで上手くいくということが考えられます。

浅田宗伯以降、明治後半から大正にかけて漢方は衰退の局面を迎えました。もともと古典がなく、本朝経験方であった猪苓湯合四物湯も消滅の危機にありましたが、大塚敬節が腎結核のファーストチョイスに猪苓湯合四物湯を挙げて、再び世に出てきた薬です。

結核は体力・免疫力低下によって起こるので、四物湯の補剤の働きで体力を底上げし猪苓湯の効果が出やすい体にするという見方ができます。現代では結核治療剤の開発により腎結核はほとんど見られません。代替りの使用目標としてはやはり、疲れて体力が落ちたときに膀胱炎が出やすいというように、慢性再発性の尿路系疾患に使用するのが適当と思われれます。四物湯は十全大補湯、温清飲など免疫がらみの疾患によく使われる処方に配合されていることから、猪苓湯合四物湯は、慢性あるいは免疫などがキーとなる疾患によいという印象があります。

話を猪苓湯に戻しますが、泌尿器科疾患以外の猪苓湯の応用としては、『傷寒論』少陰病篇記載から、下痢に使用するというのがあります。猪苓湯の生薬構成から、湿と熱の下剤→明らかな炎症性の下痢に適応があるといえます。同じ少陰病篇記載だが、冷えによる下痢の真武湯と異なります。猪苓湯の対象となるのは、痩せて潤いの少ない乾いた人の下痢です。下剤による更なる脱水で、熱は陰虚の熱性下痢ということです。

続いて鑑別処方です。猪苓湯合四物湯以外について述べます。清心蓮子飲は、冷えて胃腸虚弱で地黄が使えないというタイプの泌尿器科疾患に用います。どちらかというと急性よりも慢性再発型。猪苓湯合四物湯よりも、より虚証タイプに使っています。女性で冷えると明らかな血尿はないが、膀胱辺りが痛むような無菌性膀胱炎といわれる人によい印象があります。

八味地黄丸は、泌尿器科疾患に用いるが炎症には使いません。どちらかというとな頻尿や夜尿、尿失禁などの排尿のコントロール障害などに用います。腰から下に冷えがあり、下腹部の腹診で小腹不仁がある場合と、腹直筋が下腹部でピンと張っている場合があります。

竜胆瀉肝湯は、急性の膀胱炎で実証タイプに用います。猪苓湯も竜胆瀉肝湯も下焦で熱に使う薬ですが、どちらかというとな猪苓湯は尿路系に限局しており、竜胆瀉肝湯は陰部、下腹部臓器全般の炎症に用います。

五淋散も尿路系炎症に用いる薬です。生薬構成を見ると、猪苓湯合四物湯に似た配合となっています。強さは竜胆瀉肝湯より弱く、熱を冷ます生薬が山梔子と黄芩の 2 種類含まれている点から、猪苓湯よりもやや強いという印象があります。

最後に症例をひとつ提示しましょう。50 代の痩せ型の女性です。デパートの接客の仕事をしていますが、立ち仕事でトイレに行けず、膀胱炎を発症するようになりました。抗生物質服用で改善しますが、お腹の調子が悪くなるということでしたので、発症時に猪苓湯を服用してもらったところ、抗生物質の服用期間が短くて済むようになりました。

ところがパートの出番が増えてくるとさらに疲れがひどくなり、膀胱炎が頻回に起こるようになりました。そこで猪苓湯合四物湯に変更して、頓服ではなく毎日服用してもらいました。すると膀胱炎の回数が減少し、発症しても症状が軽くて済むようになりました。そのうえ、長年悩んでいた不眠も改善されてきました。大塚敬節が、「猪苓湯は不眠にも用いる」としているのです、その効果があったように思います。

このように、猪苓湯あるいは猪苓湯合四物湯は、現代でも古典に記載されている使用法とさほど変わらない疾患に向いています。それだけ構成がシンプルで効能が分かりやすい薬だといえます。近年、尿管結石の患者数は増加の一途にあり、生活習慣病のひとつとしてとらえるべきとの意見もあります。昔から今も変わらず一定の効果がある猪苓湯は治療法の重要な選択肢の一つになるのではないのでしょうか。